丹鶴叢書

草根集 二

117
105
2

東京圖書館

和書門	類	函	架	號	冊
	別	ね	二	二	一〇五

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

東京圖書館藏

故柳原芳梵納本

柳原家藏

草根集第二

永享元年正月一日筆を試とてよみ侍る歌

志ましらぬ四方にあまり称く来るまちの廣さは法のみ之に見

同二日朝日新にかゝる山の筆をとゝく

朝日新にほゝる山をたしめにて寒も思ふたちやいつゝ雪

もきにし年より時移り世まましらふこも侍らぬ春日

西洞院に草庵の侍しもまみすて侍く一条室町の

かゝりに旅のやとりあまくたつるにまみ侍る天の御めく

みとおほえくたつるに思ひつゝ筆ける

静なる身こそ恵のかゝまくも狂いのる事に見ハる世まませ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

同三日月のまゝ所るまゝ雲もしの雲中よりしかゝ侍るに
[illegible]
思ひらし人のんも雲中もさきハまゝ所るまゝの三日月
六日畠山阿波守義忠家にしいつものまゝまゝ[illegible]し 侍一本
こゝ讀ぶのあるしに

曉春月 山つゝかゝの[illegible]とのまゝ[illegible]ハまゝまゝもありと月ハ[illegible]
菊久盛 白菊のちゝぬためしも露霜に[illegible]ぬ杜や待ん
初逢恋 思ひ[illegible]ぬ[illegible]ほ[illegible]
薄暮松 [illegible]の[illegible]の[illegible]の戸に[illegible]
七日北野[illegible] 侍一本

[illegible]
十日畠山右馬頭持純家にて人丸法樂とて一座ありし
[illegible]に

遠帰鳥 霞[illegible]の風やさむき日の[illegible]の[illegible]
雪夕鐘 [illegible]夕の鐘の[illegible]
寄道祝 [illegible]小类[illegible]
廿五日冷泉の和歌[illegible]為之故大納言後の十三
年の佛事[illegible]
湖上朝霞 [illegible]
梅薫夜風 [illegible]

老後懷旧　友子鳥詠とふ濱のまさ砂山ハ(と类)手こるき孫をのこそなく
そのころ小野の松毎院の女ゑより梅のむしふろうし
花をおそくおくるゝ侍るに
咲まあのまの手向のぬさ袋ゑまたくひなきこそ花なる
たちのへまし　かゝし
梅をつむ斗そぬさ袋むの手向の数なる孫とも
同二月十六日冷泉中将為之同少将持和畠山阿波守
義忠同右ゑ侍持純なと旅のやとりにおきして読おみし
なのに
河　柳　古河やむ葉ゑ色のいと柳よりまさなりしゑをも思ひし

子柳

見書急　何かをんうきこのまをとふつくきの詠さてゝなる雲のうきゝ(ちさり类)ハ
海　路　んをよ風をなくろふ立ほもまさもやしの漸戸の舟人
同廿五日永明院のむ盛なるよし人のうるにいそ
み侍るに為うちそこそ乞名称の家もいとゝ光そふん
ちしきむの木のかゝふ立より侍るにいそこもなむし人
かくれなくなるかゝしこく老の身むとりゑ侍るに後も
のきくらんもしくおかひつゝ侍る
としくのつゝ色もあらひ為つる身をつきなしと花やこるらん
さそひきて詠めしくやるをなき落とおきてもなに消えん
おくる新通玄庵よりまつ侍るにいとゝとしくのむしよりも

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

梅　鶯の宿ハとゝとはぬ梅ゝしさそふ嵐のよそにさつてふる
郭　ほゝきゝ家をたてしものひ祝を詠かしつと世をハ恨ん
雁　とさふさま孫んとも詠ゝいものこの苔のたをかきやなくらむ
氷　月まめハ冬の氷なきせゝちて氷とまちふよまもの木ゝし
別　引とめよしてふ別のうしろ（こゝろ一本）ゝしらぬ（て日上）松深き床の黒髪
夕　あゝしぬ夕のうき時を夕鶯のなくひ聞てみやるさすら
同十三日ゝ家にて十二月の花鳥の歌をさくりて
人ゝおこまれし中に
鶯　くるまをとさやまやゝむ鶯のあゝ平してかきむ明くるゝ
櫻　山櫻まゝハ家ものの日数にもあまりまゝ匂ふむのさかな

水　鶏　水をかき祝ゝ鶏そたゝくもの夕もとちさるやのさゝ[illegible]
薄　むまゝきまゝ[illegible]やおくん鶯ひ杜のうさ（き一本）れたくゝ[illegible]
残　菊　さゝふ又むくまるみゝとや[illegible]まる菊を[illegible]かさ孫む
同廿日和おおよくゝ（人ゝ一本）おまゝ[illegible]中に
暁庭落花　月そゝふ庭の嵐にちるむのやとりむ[illegible]あつさの露
河上春月　あひにゝひくまゝ[illegible]を深河のふちの[illegible]かきむ月新
衫不逢色　[illegible]船川さゝもあふをハ[illegible]ちるてふくるむのをさへ[illegible]
山家夕嵐（風一本）　山嵐にかつてぬ[illegible]人のみ[illegible]孫のまゝを
卯月一日山名中務大輔照貴家にて詩[illegible]
朝更衣　たちかゝる花の袖の[illegible]めり露も[illegible]やうつ[illegible]ぬらむ

家のまゝ恋　秋なるゝぬるゝまゝ出めや初草のうら形抱きしぬるひあるとも

閑居　木くまとく住やハ呆ん始まきる松のかゝやの志ハ斗も　八类

同三日西馬頭の家にて法樂とて百首の歌をかゝて讀侍る

詠まきてハ飛鳥井宇相雅世に合悲ぶ所をかゝしとかゝる

霞　まゝの延ての浦風なるゝなるゝぬるゝや雲のたまゝかゝるゝん

帰鳥　歌にて結ひし鳥のむまもじくやとゝまのむのまゝ心も

花　めかまをぬ心の人まも附るゝうつろひまつるむのまゝるかを

歎冬　あやふしやこのよまひもいまに咲てうふきしの山ふき

五月雨　そのへや人もかよまぬさゝれのまゝゆきのやまひまゝ

廉　ゝ和まゝしとゝしを秋ハ妻恋のんまゝゆゝ荷やかくるん

月　天川宿にて人もおしとや秋のよまゝる月のゆくるん

初冬　ひとしの雅おしとやかくまり雪あき日ふみのきぬるむ

忍恋　猶そをくさてゝ人のけるもしらぬしの山のまゝ川

暁別恋　あくるまの神のおの座にむくまゝ出てゝぬまゝそふ花の雲

山　よしの山代のこゆきの神よりふゝなるしゝん岩のかゝ

夢　世をとし夢の伊たつちまの五十の床をまゝふ松風

述懐　蕙のやのなるの陰やあまりも思ひまゝ外のそ老

同四日實相院の僧正義運北岩倉に住のひしに

来まゝて六月にかゝる侍るとてかきてまゐらせし

とゝまさしし青葉の陰もくやしきハるゝぬるむの春秋の里

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

侍りし後きいとなみにいつきへも立出給はなりしかり

五月十五日阿波守の月次にて出侍る一讀のお姉に

首夏風　蟬のもの元手よりも狂うまく白小樓に狂る夏風

夏　月　いつのまに子町の小と浸るらむ極さ永くのこしかの月

忍逢恋　ぬきそまむ神をハいく篠原やきのひまとくるよそ姉妹

故　郷　思ひやれ別し故をきてとなりし住うき山の六尾を

廿一日山名大惠の皆入道者思ひなしぬとの祈禱と

く小盤の社にてまつる百そをくしにまとめられ

侍るかり

霞　明きてるきも緑のきさきやまの霞姉きるしぬらむ

夕立　日暮るよりも山風給くく夕立のやうてあきるこ孫の推けに

寄雲恋　けくなきまるとおもて夕暮のきよもきの路急くらん

六月九日崇徳院法樂とく携戸寺入道祇順まとめ

られしおれ申うし

春　月　うたぬの神におもちくるこ風にきのきなりやとる月

廉　松山のきハかけてうれ中の松を社と花やなくてまた

述　懐　学こし風の姿もいかならんきたれ花木の松のこのも

十八日夕庵に冷泉少将持和歌臣さたに逢しに讀お侍る

杜　蟬　元手も和夕源しなく蟬のも山につく杜のきて風

不逢恋　詠まあるいのちれ君をきてよもれ逢きをいそく中ぶ

山家　狩もたゞ都をしのふにはあらねど住なれし山のかくれの宿

寄花祝　まちえたり我君の浦子の波まるまや花のさかりをとことはに

廿日何侍る家の月次三首

海辺夕螢　夕波のよるもちらぬあまのたく火さだかならぬ沖より螢ぞ

夜夜待風　中川の岸のむかしの月をのみまつ風ふくと夏の夕やみ

寄松木恋　忘らるゝ身の松木のさきとてもつゝみかねつる袖よかくて

當坐

浦夕立　あまのすむ夕立さわぐ塩風にそれかとなるゝ浜風よ

通書恋　ねてもおもひさすらへての鳥の跡かはやとまん中のかよひち

田家鳥　かる小田のさなへとるとも[illegible]杖の村る

十五日山名刑部少輔持豊の八幡法楽にまかりけるあつめられしに

鶯　花やとき春の氷梅の枝にちらぬ鶯の声

泻月　ちる浪の月の光をかきわけて月の秋の浜風

中　ふく風も人の心のうつりかはるらんと思ふ

七月七日北野の社に侍りて松梅院に侍りし女

より七日とて松梅院に体を侍りける女

かよひて梅の花に咲かゝくも出されしにかはりて侍る

橋をわたる天の河原の星逢の夜をまちつゝ

長星のくもりなき月の光や秋のくれの空

立なれし狩やへだてん小萩花かさぬる天の川

たなばたの雲のかよひ路きらず萩やいかなる山のみるらん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

神も又光や海しまかよふらんむまふたらひの水れんハ
う神くを詠めつるに神かきやよるへの水のほしの光を
色こそあれ家すゝ深の神（き一本）はしれ代もよしやかさきの橋
かやうまきたりしを女さまくかへしまゝみくいて
さ出（侍一本）るとかきつゝ侍る
口称さき天の川淑の海ハ光の枕もくちや果なん
長星のうへき青とや見てより志るくもかくるくりの糸筋
志ましし侍乞の川霧んしくたちなつてそよいの小たち
やて又ちりや法りんたなきのやのむゆりたちふりく侍
神と星光りつゝ小ふとに結ふたらひの水ハいく水勢

神かきやよるへの水に移る星勢をてや新むりふらむ
色こそに神そめつらん韻にてよひハ勢よ雲深の神
同十四日右京屯性智院係なるやうふく身よりて出侍
しに十八日嵯峨野（ナシ一本）にてきり那き鐘の後晩よりつゝ
侍るとて故人之のほとなきまけつゝきみ那し其人の
霧をとゝて侍る身の法出なきと思ひつゝ名ら出しく
さの舟なく神ぬきたらんりのつまうきをきりの蜀の枕風
同八月九日西岡海京寺の住山房源の坊まく三首
のおあまぬあるしけり
海辺月　法のうに此世をきたらひ延せの子ハ宿も定めひ月やうるらん

尋虫　夕露に又こゝかく見えて松もの鳴音や秋のもとの草くき

羈中雨　袖ぬらし夕の雨に宿なくハ為なのかゝものまくら耳りや

同十二日お別し坊にて宿議判所合かしりし

初鴈　夕日新しきようつゝに初鴈の深そめなれ雲のいろの乱

秋夕　くらゝにいとはしやうしとても夕ハ仲あるあれの夕雲

恨意　いとをめてうれ夕ハ苔の下にれ枯ぬ葉と思ふ事なおさん

同十五　松中繋大浦のまゝにて月深をしれ

初聞雁　こゝれくる初鴈の夕ハ此あや雲のまゝにおりやうくらむ（さ一本）

山月明　おく露にやどるハ志ゝれ松の下草こえて いつる月うけ

故郷松　松にてるまゝのかゝされ古き世をとひてそかゝる鳴のうら波

當座

月お雲　月洗ハ何をいとも志ゝ雲の跡ゝるまゝ四方ハ秋風

月お草　露なくゝ光をおつる月草のさゝ深なれ天津ゝ雲の事

羈旅月　袖にこむ夢をもゝ事ゝ侍とても見ゝ雲の同し月新

同廿八日草庵にてよみ所あるしに

荻風　東袖に宿ハ一白露（き类）をきゝ東や末にハ風そんなくとも

秋意　ゝしハ末もの秋の雲にて寒おきゝ侍る庵の淋ちに

旅泊夢　浦のおとに松にえかゝ志とるゝいかゝる夢をこゝの浦風

九月三日河陽ゝ草庵にて夢おもしに京にむこく

あまさつしのハかゝる津をくおりしし

侍りしやこ此もちとを作ゝ思ふんこ浦の露をかしんに

遊し

かつてそこまつハ此後の霧のまゝにへまゝる程の手遊をもる

同十三日実れ流の伊山義運にてよりて二十三の頃

を始まをとるをよみくまゐらをし

暮山月　まみのかゝる月の夕の山のつらかくるに似たる雲そのこれる

河上月　里まてあまてく見るあさ夏の花ゐ川さらぬ洲に沈る月新

月前木　山りとの名栄の木のまゝる月のむかゝを深る杜のむら雨

月前廉　嵐ひまくしたかてもかくしまゝ月にさらみて廉やなくしん

光惜月　杜の月かくてそあらめとむかゝ夏のこさらむ杜をしる後ひ

想て秋風　ふこかぬなりの落れもふるき世のくまの朝に杜風そ行

芋杜

海辺秋雨　玉りしも杜なき浦をそめのけて雁時又江にふる時雨かな

幽栖擣衣　菜なる浦ちかおくのやとりにもまもむ人ありとうほえかり

紅葉交樹　色深き梢の雲の浦まりみくるこ孫のをみち葉

野外秋霜　七月の霜に浦なき草の原をすていくまと浦にとまし

家秋月恋　なく浦人にもこえ(上类)ひよもまゝら侍さらぬ月のかゝみり

家秋田恋　志らまゝ夏をおくてとる袖なしぬ春かまいの小田の夕霧

家秋草恋　うつろふもまさしきくのむんよりやしましの霧なくこそ

家秋虫恋　志のゝやの思ひよ人のまつ(と一本)ハてて(て类)虫の鳥つらさまゝの杜風

家秋枕恋　おまぬよの杜の夢語の関ちや霧霜空き枕なるもむ

山家暁　いなり山杉の庵のるゝこき世にいつまてらあるを河音月

名所旅　さよの山さとを里ともたのまれぬかな孫の嵐袖にこゝろへて
朝眺望　いつるより日新そうる新つまやほのむらひの志かうの濱書
述懷涙　おもひかえ[illegible]のうきたれ[illegible]に落そめて光の深とくハ来り（そ 类一本）
釋教月（类ナシ）　ふとゝ[illegible]ひの露とかくしむ孫の草のむねの月新
十五日刑部女輔の家に月次（の一本）もし兎の三首
遠擣衣　[illegible]人の袖の神案
田家月　秋の田のかりのとまにふく稲のかのこゝろ新の月新
寄神祝　世にこえて[illegible]さかえむ[illegible]を神の宮め世にやへ垣
秋風　[illegible]風とて秋や立ん
秋鐘　[illegible]月の秋の鐘に[illegible]

其頃右ゐ[illegible]の祖父の[illegible]のつゝしに[illegible]陀
の名号をとりふまへ一讀をし中に
春　なからふる[illegible]のとしのまち毎に[illegible]
むらぬの梢の露もむとあぬむのやとりに山ゐをそ[illegible]
夏　あくるよの山[illegible]
秋　[illegible]
[illegible]
冬　ふるやの[illegible]里の[illegible]
雜　つ[illegible]の[illegible]
廿二日[illegible]の月次に

沢辺暁鴫　秋ふかき沢への霜にあけほのの数を鴫のはねかき

撞鐘送秋　暮ぬ夕の鐘も秋をおしむにやつきなはてくるらむ

奥ナシ 當坐
残月越関　月も猶木のまをもるゝ一葉の光にみえし越ゆる小坂の関

蔦　つたかつら風秋ならし松の葉にかゝるのきはの色なかるらん

秋恋　恋くまてはつれなき人の秋ものや猶山をもかくるらん

夢　たましひのあらやの夢にやすらはゝ見ゆめかはるとそおもふ鐘の

そのころ中務大輔のなかより詠草を一見のためたまへ

こそかはし侍りしをたかひにみえし侍るに拙く出さる

事の小子層よりかくきりてかへりしとそある

をおもふくるしみにあそふけるそてめ給へる

かへさせ侍りしにみ給ふに

こゝにおくらはせまの玉を数ふるのその光と待やたのまん

かく侍りし返し

さなからねもくれとさのをかさなりと後のこころめとそおもふ

廿九日に秋をはつる日すゝましき事ある　将軍家南都

御くたりをみをしけの跡をとふらひみちもさりあへぬ人

の装束なる車にのりさきをたちはなれてまゐるをみまいりて

ちらぬもみちのおほえし

秋はつるさかのあはれおくりやかよひてこそ深きなるらん

十月になる大嘗会のおこなはれしくの後の秋をとふらひて後

の小松院へ出たまへるをきゝ給ひし御客の中に

春曙　あくるよの月とむとのえをもたゞおこめてあむまたに

鵜川　志まの川なるおのうたなるものくるきもたゞてや浪の下くるん

秋夕　うしとてもよもいとまれしまゝ世にあらん浪の秋の夕暮

寒松　あらまれしまゝりもこえぬ雲の松さてしも逢ハ深きえたに

暁窓　くゝ松いと世の人の家語もつゝきかたみの類のあるの月

閑路　我留山ふるき猶ふるゝまくまゝて我世の閑路なるん

その後人にいさなまれたくとかのとの家まゝとりとよかりつゝ

侍りしに山風の志くれたるもしかのあるく村雲よりいつる

月きらくとしてえんなるに出来るまゝくたゞまゝみ

あるきさく都ふかく坊よりつゝくよみ家あるしかり

山時雨　もしも思ふ雲まゝ山の月なくハ時雨やまてん浪の川浪

忍逢窓　萬葉にこゝさとかかりて思ひ稀の夢にもあらぬ神の雲を

寄る雜　いまくゝ雅中の清みぬるき世もみしとしまゝ寄るらん

あくる朝ゝ雅のをさきの坊とりしまゝ

冬河　山のやまゝ小のもみちをとしてみけく氷をとめて

冬竹　呉井のよみまの雲の朝戸出に葉ゝ風の音にてこくて

冬鳥　お那くハ清瀬河に祢覚しきゝまやまの小鳥の志

十一月ハ四日萬葉月次のこゝろ

冬月　とさしをぬ月の氷の一葉にえてよまに以ける天津木にし

千鳥　あらき風岩うつ浪の和のおりなきたる和よりゐるこの家

待急　ひやしかや人のこゝろん桂の戸も月なき頃よさぬよひゐると

積雪（當坐）　谷川もうつゝれたる下折に雪のちつゝ水なるこゝろの外

忍涙急　袖のうへにおつるもしらし中におきくハ人の涙とやみ重

天　いそくしきふく月の明るに天の戸たく峰のまゝ川風

同十六日生近院とふにまゐる　歌をさくりとく

山時雨　定めなく時雨にまゝふうきやをおくりむくて山風そ候

夜衆暮　いそくしかしるる月日をしひ祢のよるの夢ちに逢やけらむ

旅行友　ひまるなよ舟待ちの川岸にてかたらふも世の哉字

山家杉　かまとくならふや杉のことゝちを保るおりて杉に居る

同廿六日河波ゆる家の月ゆふに

綱代寒　さゆる日もたゝ木の間よりに河浪なきてあしろ寒

古庭冬月　かまとくり昔の庭の苔むしろ月の秋を志きし此へ

羇中杜　いと祢ん桂すまゝむ下草もあきさの杜をまさてちにしく

河雪（當坐）　以おろ浪ゆる家の雪や埋むらん嵐にたゆる富士の四方川

禁中雪　うつろひし下葉もみえ荘の戸やゆるゆる祢ゆるの雪

里雪　狩ゆるぬ里とゝゆる深草やあれまし坂の雪の新をれ

十二月六日　茅屋月ゆふし

庭早梅　さしてそ庭ともあらく住居にあへ候そのうめの枝

爐火似春　埋せのあたりをぬるゝまとつめハけまゝ志きさきのよ夢

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

草恋　恨こし草を冬野の葬にあへての雲の後の夕の後の（後の雲の类）

積（當坐）　雪　雪のうちに花とのまちしてし山春もたえてこゝふる雲の下行

不逢恋　うき年にとしふるむのをよりみえれ呆ぬや葬なるらむ

述　懷　たとへてよ為うきふの行の房ゝやことをまて住まてぬ世に（ま一本）

同七日北野社氣殿百首をまるゝ帝にあるも

同十四日中務大輔家よく月ゆゑしりし

炭　竈　宇治川のみよりこやゝおくしに積の炭やくけふまなるらん

歳　暮　けめくる月日なく夕やまのましにかまてくるまでのな

祈　恋　たのみきくかくるとうけぬみきさまさまゝゆゑのあひて神垣

相（當坐）　雪　積雪につりとみきくおくまし松ゝ三嶽の雪のまさをまし

（芳松）

神　樂　おりはまさまつやのこまてもきさ雲の雲を雲のまゝ所り

簾　宇治山のふりとのまゝ葉かまそめていさよふ浪よくゝ舟人

十八日西宮海辺なるにまかりしに月日晩雪ふまたなる

といまさまさく埋雪のりとにいふ孫ふまくぬさましに住正

とうおきく雪とこゝくおくゝ見侍る

いくゝる月の光も志て雪も同し新なる雪のまゝの見

かをし

只くそおとつ見る月雪を夏ふるまゝぬ雪のまゝのめ

そのあしたよこゝあるしかし（中一本）

落　葉　木のあまりなる枝葉を吹てて雪まてくりる雪の山の世

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

[illegible]

三日月のいつの時よりもこるくらんそえ侍りし

[illegible]

五日[illegible]毎のすゑにくぬりける日寅上人の[illegible]（十三本）

[illegible]

梅風　袖のとりかつさく梅の花のかを[illegible]

忍恋　深川袖のしらしらひまもなし末やんのそこくるしすら

山家　志つかなる山のんをくいさう友としたるこ住なる山よりり

六日何波寺[illegible]

雪中鶯　消ぬる梢の雪のむまさにさいやさきたるの鶯

初逢恋　きぬくの[illegible]やうらむ思ひ[illegible]みさしし[illegible]の[illegible]

名所松　[illegible]の浦に五十年の光の[illegible]ぬんもよをし松のこの[illegible]

七日[illegible]ことのすゑにくく小[illegible]の社に[illegible]くんに思ひ出ひ

[illegible]月の木のまよりさし出るとんく

年こえし[illegible]ゆふしても木のまにかゝる弓張の月

八日山名刑部少輔持照の[illegible]松を[illegible]（春一本）

雪さゆるとの人の松の[illegible]ふるも深くたつ[illegible]

十二日太馬頭持純の家の月[illegible]

霞春衣　[illegible]

松残雪　[illegible]

寄神祝　[illegible]

同時よみ侍りける

立春　[illegible]

寄雲恋　[illegible]

浦雪　[illegible]

十四日[illegible]毎のるまにくあ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

残雪　[illegible]

忍恋　[illegible]

竹　[illegible]

同廿二日普勧寺[illegible]阿悉坊の寮に一[illegible]

早春雪　[illegible]

谷餘寒　[illegible]

恨絶恋　[illegible]

山家嵐　[illegible]

二月七日下[illegible]

海邊霞　[illegible]

春月　月ぞすむ霧のうちになりけれども つひにまゝ世ハ春の雨の新
不逢恋　消やらでおもひあふのものめ此霧にかきくぬ（ん楽）今とそまつ
同八日中務大輔照貴家の月次之そのふ
河邊柳　うちこのやたてる柳をもし姫のものゆめにたとへてやうしまし
夕春月　かそもとて霧むとのへの夕月秋深（ふけてそ楽）たのむしてまてなき
名所鶴　ワのうちに猶そのまゝハ田鶴の光て及まぬ孫にてなるれ
同時よしこの此中に
餘寒　猶さえて雪そにかつる二月の雪やかきみとまてかくまらん
切恋　ひしさとよしやなそもむつきにもうれよもよるんなるさとハ
旅宿曉　春の雨の新もうきぬ祇ら月もかきぬのしふのくしこす

同九月の河波ち家の月次之そのふ
新早春　九重や時にまへまと住人のんのむしもまや来ぬらしまを
山路梅　りのつる山路の梅に山人のさらに祇そむのまてまる
寄國祝　天の世の君にあし京の君となりへと生しのちてさのふ
同時読寄此中つり
花未落　花来ちに山かくまにおもしもちらぬといふまの風にも
寄船恋　祇ちにかれ庵古舟のりへとも（まゝ楽）ちらぬ志那のおくの流波
山家名　まれにきてみるもさむしきの水を汲志ゆきみやおし
ナつる五ゝる人なくともあひて初年にて梅荷社なく
とのみもまゝく木情のおくいてゝとて木の梅とこん侍る

そまたに經冊ふしたちにいまたくおよみしに

聖經霞　聖人をまさきにあふまし人の神の神に梅をまさきにする

擣衣　うつ者もかたらさまたり妻妙の枕もふるき秋の花にて

岡篠　葉がる宛とよへ是のへの家に志をれぬ松のこゑの孔

十二月左衛門尉元康資盛安元綱なといはしへ家

まさしくとらしなひ来まさく一讀まゝ先しに

見花　古へもなれしと葉のむの後をそふまちの友にまひぬる

家草庵　つきなをしるにつてくも我宿と折む蓮の後に寄さ

家社祝　三熊野や濱ゆふなるぬ志め縄も我宮にかかて君を祈らん

十五日萬葉の月次三そうし

草枕

谷餘寒　狩さえてふるしくやらの光なき雲をもらふまちの谷風

月前梅　まちのよの木のまゝ月のみ所ハ思ひ出あれや梅をてまたる

家園庵　清さんさかよふんの羅ともて宮志て神にこゆる後なる

お所し時の讀ぶの中うし

山路尋花　咲むのやとりてまさきかまゝ山路の鳥のこゑにまかせて

古寺花　初瀬山をのへの讀も川流もむのゐとやまちの（ハ类一本）もつまさ

園路花　あふ坂やゆふつゝ為のゆふしても羅路のむまはたハかてつゝ

ちゝ夕清て春夕月とも影をとりてく（各一本）

此夕雲にて狩ものこゑ人を見せしいはしなのつき

三月六日刑部が浦お照の家の月次三そうに

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

待花　さゝぬまをいとくらの哉夜もしも白ぬ山路ゆゑん

曉春雨　新もしる（本类）五月の月の新なるゝ雲ておつる神のまゝ

見　恋（类ナシ）　浮ゑみ入ぬる後によるゝ学もしるめまゝ所かゝ中ゝ

おなし諸ゝの中ゝ

早春鶯　谷深ゝふるまゝをみゝにおしまゝまゝの月新にいつる鶯

依恋祈身　うき中にさらぬ家のある世もしらぬにあて身をや祈ん

田家鳥　鳴子をもしらしまゝの小山田に落穂をさゝぬ四方の村鳥

三月中旬　春も盛なるまゝしかゝも風にいつるをもしる

侍らひまりぬるに十七日小姓松梅院の女ゝより八

重桜をおくゝ給ふりてえてなるをおくゝ出侍る乐

茅和

花のをよくゝ出しまゝうつるまゝ白ふくまゝるまゝ万

里ゝ馬とゝふ馬を落よなしくまゝ別とおされまゝる

あるくしまゝしかゝくかゝるまゝ送まし

ふるゝ田にをまゝる神の白雲やまゝ所まゝて猶白ふん

折ふしまゝ人（出一本）侍るゝつにくまゝてまゝやし侍るなゝよゝ

まゝひ出しゝるに又の出しよりまれ人のをりふしもしらひ

かやうのゝのなゝ法ゝまし侍るんなゝきなゝかゝて

をまゝしらぬまゝてくやまゝ雲ゝ白ぬ花の袖を

同廿六日仲別和尚阿悪坊なゝともひく西昌海

印寺にまゝつまゝく同廿七日此所をしに

田邊帰鴈　まれくまれまのあら田もまれむ花の水さくなりと人やいらん

逢　恋　よしさらはあくるもしらし留るさ人とも身をもなれ給ふなりて

閑　雨　鶴廉河宮の戸なりもこえ佛ぬふまを出し田のやそせ白浪

澤　鶴　住よしや同し緑の淡浪に松よりうよふ淡るのまつ恋

やよひ晦る同し不まくら桜のちまさるとうんとく

変なるこの桜をとゝめ置くあってやむにまものいらん

どもの浪風おこるまくふし侍るに僧正の才へし侍る

おとのまをおしてまを惜へきにふもむ所く雪浪をうき

みし

このまに好まる花のえてまそにふまもの雪をとまれ

五月朔日同ふまくる鶴をさくるまく

森夏　秡　ふるさ川ゆふしく白し鴨のまのえそふ杜の木のの下浪

草庵雨　もまあくあもんまもふんまふ宿のあるく新まを

塩屋煙　藻塩やく海人の後やにえ煙やてやまの浪とかんん

同ナいる松蔭浪へまるしに女さより現に經冊をくく

一泳をしふ

杜首夏　おとのまは芝まを蔵き夏きぬとゆふまてかくる杜の下子

忍　恋　何かせん世々の都もはふふかて絶果ぬ我ハあるまれも

暁　夢　いまさ忍も神とまるへの夢の告さるふこをよ曉の夢

五月二日河恵坊普勧寺のおくに寮を法らるまて住

侍る柴の垣ゆゑ柱の柱等木のたゝまはいもら里まめ
きゝく都の内のんちも志侍らば一読とみて歌をさく
ことなり

初春霞　霞立まちの元の下かさけ立て山にて清かる雪の孔
五月雨　瓦川くそ八十瀬にあまりもいさ志る浪の落る五月雨
遠擣衣　うちあらはまものむすたか中にまさかまりけ忘ゆゆらん
寄木恋　いとをめてきえまて志ふとおもおてあるを粉まぬ志きまの
山家路　ふとかし家山里にかれるもいえぬ都のおくの高か孔
端午の日深草夜杜の雲こんとく人に誘出て神
輿なとおしたてまつる寺に追院といふ寺にて一よみ

まゝめら社しに　中一本
杜新樹　深草や杜のあらしにちる夜のうちもあらはに落る夏の孔
河夏秡　あさ川やあさのまあらはしまゝ河立市人やみそきしつらん
祈　恋　志ひて祈あふ都の後の祈きことをうけば神と又や祈らん
往事夢　かつはへき夢にもあらはさよ志まてきむしの世のうつは
同廿百歩禅寺といふ事にて正安侍者とも侍ましたる
侍る歌をさくことく
夏　月　七月のあまの岩戸の宮此戸を宵のまゝ形にあくるこゝろ
寄衣恋　さめやまむよもの元をかへはも思ひぬ夢の葬とそ見る　まつ类
嶺　松　まちひの孫松も嵐をうらみやゝ夕ゐる雪の下にさゆらん

サニワ河波まるの水の月なみかり 三そくは一本

照射 よる庵の星うとしの出るもこ神立雲にあくる鏡和

夕顔 ちとくよ何のむとうしろ家のまゝて人のやゝの夕のほ

橋苔 とりまゝむふまゝ橋の板まゝみ世ゝる苔の袖もつゝむ

おなし時読ふ中に

山花盛 櫻咲ゝ花袖のうへに匂ひそおもきものしき風

六月稜 みそき川澄になるゝ麻のもにまゝぬきかくる波の白ゆふ

初秋衣 身にしまる秋の思ひと埋のもの袖にたまゝぬ家のしらむ

絶恋 うさ糸とよるの数の絶しよりもたゝひそつてさくあ此橋

名所拙 身ハかくて柘木の松木に引綱のたえてくるしき世をやおさん

子拙

六月二ツ木 隔の月 次此ふよりも正廣に懐帋を出させ

侍家

城外夕立 神無月かくてそおしう夕立 十二楽 のやうも 都の山めくるしく

江上蛍火 まゝてゝゐる岸なゝこさひ江にさそふあれハ川蛍なる

歎無名恋 もしかゝき袖の浪の川社志のひよ衣 りしろも楽 柘やまてまし

同時よみ分の中に

泉為友栖 とへりしなしきの上のかなもやうこのもそめなゝぬ友のふるな

不逢恋 消やらぬうきなも世の数とや恋といのちにまゝせまてまし

晴後遠水 山ちとの面のうちのおやうにあらまれきゆる形くの浪あ

八日刑部少輔家の月次の三そくり

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

泉　手に結ぶ山ゐまのしたるゝ水にかつ〳〵いそ〳〵枯のしらせ海

扇　山に八月あるとてもたゝへめやあつきさ松の園のうはかぜ

夢　まとろまぬ〳〵松の枝とおのつゝきのふの夢は覚るとやさん

おれし時の読ぶの中うり

路夏草　世に蔵きさしのもみやも夏の草の芝の芝夏にあふこと

近　忘　小松もかさ孫ぬ袖のひまもふうたて匂ひと深く深法

山　家　山松のこゑにはあらし世のうきめこえぬ嵐ていのに此世も

同十日右馬頭家の月頭三そうり

夏　風　此も猶思るせつより六月の照日て風て四方にすゝしき

夏　氷　夕立にたのみ来にけり中川やとれいまぬ氷もかたうへ志て

夏　忘　ひ堂あくるまいつるむ家ハつまなき袖の中に水にまの社

同時の読ぶ社中に

埽　鳥　詠つくるまさこのうるとかたみとや又とし消てのくる人の孫

庭盧橋　橋のかてふむ庭の芝のしにてまもむしの絵やおらむ

湖　月　鳩の海やよものをしれの蟬をも思ひ夜浦に落る月ぶ

聞　忘　おもひし露ふく新の荘のまにしをまれそへて袖の枯風

眺　望　おきまさきやまの小舟漕ふよも夕の鳥のかへるとそ

廿二日阿波ちの家の月頭三そうり

朝氷室　木のまとる朝日にむ氷室ちやて常や袖にすゝしき

晩夏月　みそきの夏とさそひ〳〵月の新まてとまる漱のゆふて

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

聞久忘　津出あさしかはらぬものをいはの上猶ちつきて鐘の聲ぞ
同　時のよみ歌の中に
蚊遣火　たりしかむ扇をしたしけり火の煙をしゆる夕部の宿
忍涙忘　枯くれ袖をかくしくつかしを清ふ澤のおちてしをしけれ
名所田　ふしの河をはしし小田の秋のかやまをしたしおまる波とみん
世日下望る益之家に堯孝伯部なと来り一読をしに
夏朝　露もまたおきあへぬ床の秋しめり見えけるつきて反たるかな
夏秡　みそぎ川くるしい夏の日新さへ世のよとしのとるゆふして
夏木　橋のおもてあるしまの木に袖の風うとき風をしきさ
夏獸　高木野に立やとしりの思ふ紫末のとりし消る物もなし

七月六日　草尾月は三そに
立秋暁　きてもまた暁なる秋のぬさしきるたまかしや暁の雲
夕萩風　以ま文あんにもうき蜘とものひかるをしの夕風
田家鳥　秋の田の葉おもと鳥のくるまもなくてうれ世をとるる鳥
おなし時の読歌の中にし
初秋露　一葉ちる新しの桐の下葉にふとらかたき秋の露ぞ
雲端鳥　鳴てくる厂の澤やおきふしんつまさしける雲のまた袖ハ
寄鏡恋　もしたかのかくしぬ恋のつりし袖や望ちの鏡なるらん
山家　靜なる太山もそよし篠のものんさしけ風のまる
七夕にも梶の葉の七そたむて侍ひとしてとむるかし

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

おなじ河波なるの家にて一読みしに

待七夕　待まさきまさ遠く天つ星ゆゑの雪にしやくしき

七夕雲　たなはたの遠相の座の乙つ風まれなやきのちり拂らん

七夕霧　さほむのかさしも記れも除き霧のまきれの天の川（つ类）の世

七夕橋　川橋やかゝる海の村間にぬ上てゝ宮の秋のもみち葉

七夕衣　織女のおるや五面まさたてぬきハ雲霧志るぬ天の羽衣

七夕船　君よ河（引类）つなでも急て川浪にまやのうちけぬ乙の岩母

七夕後朝　天河のさあしよさきに車とあらにもつくかゝる浪家

同十日右一ゐ浪家の月浪の三首に

初秋月　うれ雲に浪のうち月ぬまゆこもまいにまくしもみち秋のまさ

籬　槿　消とまる露こそなれ新色の夕新まさぬむの籬は（小类）

古渡船　舟とむるよもたやかちとまくしのはりれ浪まれ夢とまさまし

おなし時の詩家の中にて

禁中花　まつらきの世にはなれし古への春とみしのむに問はや

水郷月　橋姫の袖とは月の露霧とそ示る拂はぬ宮浪の里人

寄火恋　うき中のかはりやきさハ元の中の光のまさへ狂そのとき

山家杉　住まひぬ杉のうきかの杉のつ雲志て孫やとまらに山風に

同廿六日河波なる家の月浪三首にて

海辺秋風　んなるき遥の家ゐも秋風にまきて思ひやおしのうち遠

虫ゆゑ何方　草の原やこてまさるし虫の孫ハいつれの露のやうりかん

雲埋山路　一むらの嶺立雲ハ山人のぬき捨ゆくとこゆる衣ゑ
おなし時の読歌の中にし
槿　花　七月や秋の日新の神家の雲とおくまて結る新の浪
恨　恋　遠さる頃もつゝし世中にありとも出ぬ宿求てん
田　家　くれそこるあしの丸屋のまろふしにしもとくなるぬ山面の神　ハ
八月八日刑部少輔家の三首
浦　月　夜ふ类ひ雲のやとりハ詠も遠し浦にあるこの程人の月　の中
初鳫来　あさ衣志つゝ年なるとてまてのくる秋もきよその神ノ
野　旅　雲かむすゝの志のやの仮の戸をまて明ぬよの神ハ志をて
同時の読歌の中に

深夜月　雲ハおく小松ハ半にあまつる東西の月の秋のこゝろも半
忍涙恋　志をしたり小松の蓮にくれも稀て猶も深を志きやおき
田家鳥　秋の田の仮寝たるのふしとも落穂のなる程やこゆらん
十日右馬頭家の月次三首
古寺秋夕　笠置山おくの岩屋も袖ぬ出ぬ此川上の秋のゆふくれ
海上鳫飛　浪の上ハ秋くる戸のむ事をとゝきけるの雲の海のとてこゝ
家樵夫恋　葬しハうきこゝろの夏ハへくるとしもしらぬ中か程
おなし時読歌の中にし
浦　月　浦人の志ハ汲袖にやとりても猶新とこゝ浪の月の乳
家杜恋　おとのもふかくしもいさやしらぬ波のよとるなきこの杜の杜風

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

山家夢　稀やりきくぬる秋の夢に入月もさしこふはあらぬ峰の松風

十三日草庵の月は三そうり

山　月　雲になきさしまし半の秋の名は一よくてつるやまのまれ月

聲　虫　新こえぬ聲ゆるのこみよくなるゝ松のくまにあきむしのこゑ

祈　恋　ひのくまむかしきまをとふる川の秋のあるしもあきて葉かな

同　時よみ歌の中に

花滴山　いまむのまいやのこなりのゆるゆとくこゆるかつらきの山

海邊廉　浜路にて山路の廉も書ちめて恋ることの秋の母人

朝寒芦　かれ浜るむ江のわしを出る日の夢ふかの新もさゆる雲かれ

怨　恋　つひに又恨の末のとわらはいとふ恋路の夢にやうつらまち

旅　泊　友舟のきしる湊のかゝ枕浪とそかゝぬ祈んとてもなし

十五夜は草庵にしたりなる免あし侍に月蝕とうきこ

しこのともよひのまのまのまのまにしたいてあるもんやう

ふくるより雲もさきこゝあくるまくれりしらるもしに

松梅院の女をよりて文のついてに

六郎にんをそふる月よりきさきよりおのさいをとゝ

かなし

うかるくきさいもしたゝ浅月にんへてつるやまもなりこ

十いる頃蔵（本ノ）ともとく駿河国よりものをとゝる僧あるも

守護上総介範政ゆるもあるも雲祈禱のためとて住吉

法樂百首ちとめ[illegible]中ふ

初春霞　[illegible]

寐覚郭公　[illegible]

夕薄　[illegible]

谷月　[illegible]

風前落葉　[illegible]

寄宿木恋　[illegible]

老後懐旧　[illegible]

祝言　[illegible]

九月二日右[illegible]の月[illegible]

垣葛　[illegible]

擣衣　[illegible]

眺望　[illegible]

月　[illegible]

初秋風　[illegible]

朝河霧　[illegible]

寄浦恋　[illegible]

枕夢　[illegible]

十三日[illegible]

河霧　[illegible]

柞紅葉　ちらぬなよ老木のもとそくに一めあひこんとの家乃秋風

此家ハ山城高槻とりゝ江にて老る母の事也

夜灯　そむくおくかへなるそのまゝ形よるそくやしき世の灯

同ときのよこぶの中に

春月　乙酉の春のこをよさかなるうかゝ消て月やさむら世

夕郭公　なきぬし卯も月和さゝ深のくれ山ほとゝぎ

紅葉　入日さゝ雲の上のむら時雨そめてかゝやなる月の雲

深雪　まてしきし園りるやのまゝ礼の絵ふきふとまる紀路の山城

家獣急　思ひてこうちの後ものの中和中に人もとうむる里の犬のなし

懐舊　遠き世とくをやこほしゝ心もゝ此の老の姿ある世も

同十四日中務大輔の家の月次三そうり

秋夕雨　秋山やおりのてもかゝもさん深く梢をなきくりく山ゝ

庭籬菊　新こゝ雨る籬の菊の花さかりもまさこそ座の月ようつゝ

家車急　しゝまてとうき世よめくるもあふこともまゝのこゝくる水の車そ

おなしとき乃よこゝの中に

泊擣衣　かゝらぬハ夢をハこゝの濱つらくる此ハ海人のうち衣かな

菊上露　雲そなきうちろふ菊のこ此ふたかりとゆひの露結ふらん

家木急　思ひ志ひ法ゝさんのおく山にたつをこまの紀のかゝもぬんと

往事夢　志のもるゝ昔をさめぬ夢そともこひあハする時そなくさむ

十九日右馬頭の家にて冷泉形中将持和なとおもしく

よみ[illegible]乃おもしろ

雲間鴈　雲のもふにつくるや鴈の玉章を袖より袖ようつゝとそこゝる

里擣衣　やゝよなる月のかつらの里人や子を思ふ衣の衣うつらん

祈空恋　ふしの祢やむなしけふるの末絶ゝ神の名をそ[illegible]

絶久恋　かよひこしふる社に篠いつの世に結ひし露の袖よくちけん（つら一本）

連峰松　いつくまもとるおそ嶺つきむまかくしをる松の嵐ハ

廿八日河渡寺の家月次の三そ

江月冷　白露の玉江の流も秋のそく芦のいとなく氷るみゝかな

秋時雨　深のこせしくるゝ山をとふ嵐あらしくハの秋のもみちも

名所松　此法の末葉をてらしけれあまたあ埋しこつの[illegible]の松

同時の清[illegible]の中に

河上初鴈　秋[illegible]清[illegible]人川の名の[illegible]いまそなく[illegible]

残菊白　[illegible]ハいぬうつろひ[illegible]白菜の[illegible]や[illegible]

寄櫛恋　さしかくしたりしそつ[illegible]髪も八[illegible]ゆつのつまくし（へ楽）

田家鳥　くるゝ[illegible]むらくに刈田さむしきあきの[illegible]

十月八日刑部少輔家の月次三そ

初　冬　神無月冬の春日の薄[illegible]

寒草霜　[illegible]

古寺　[illegible]

おなし時よみ[illegible]の中に

時雨　乙津風さゝ里さくむらやのたゝのまゝにふるしくれぶ
寄獣恋　あさし名（ら楽一本）をかるもしられくんしら思ひ出ぬ雨の床そあてけ
寄路芝恋　ふゝかし人ハ昔の語とも花さゝちせの座の葉れ
十四日昆沙門十輪院とゝにおよく一坐あるしに
朝時雨　落葉をしく朝の梢の日朝にそ深やさきむらしくれぶ
寄戸恋　たち渡りとゝてさ萬をさしら孫古代ハたてしきぬ〳〵のさい
古寺　松しをる嵐のつむ入おのおのよりたゝき岩のふるてら
十九日小雪の御経始朝ちやうさんし侍（し一本）に雨降て松
梅院に山里侍る廿日朝狩やまひ侍るしに女ゝさかやさけ
ふゝハ狩しくれもいて深さひて日朝もしらぬにさのうさ雪

かくし
志くれにもさられぬるにふる出て行ひ（志ら一本）ゑはまるんを
御経をしての朝内雪のうへ出て見（め一本）くしく御堂のうへ
をうにたゝきみ侍るしにさのふのえ姿なく人もかよも
ぬ時へてなるを侍るけとあれにおもえてたちあへる
筆にまゝをくかの女（ナシ一本）ゝ人清のもし侍（け一本）る
朝のやうタの雪となりたし人もくれむのしの夢ハ
なるも花の春の葉の秋にはしたるしたくひ
ふしらまゝくしのけとなりさるし朝霧ともにこゝ
見るつし和のまの座の語のうなさ（き一本）子西人ハ今や並

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

のひよもやさしくんと世よさしめなくて

老よりも世を住まひぬとよかくふさも遠くさきけふの雪

朱の玉垣もかさハ神さひてまゐる人もいえ（なし一本）何よつけ

くもかきまひんちまるこやうちとのかしきをみるふも

きのふよハ似（も一本）て老むとりしとしらに柄木の枝の後のこ

忘しきさいちに（る一本）

ふそ物あゆみをきこ人おもハ神よ諸のんはえ遠し

法のむしろのきしのきてゆゑ志るし法くるものこ

きらいくさいて

かやうよ志るしくよしに法のむしろとうきてかの女（の本）

子物

かくつきし侍ふまてそのつひにかおくる也（け一本）侍る

いのきくも神もみるらん数ふ元ちまてもの法の光を

ふ至し

神ハ物あきれとやうむ法の為ふきまつるもらしかしも

同廿六日海京寺の住ひて御祭の行幸ふを

ましし様変よくおあるしかり

冬天象　六日そこる雪のこそきもふ屋の天つむつきの絶ぬためと

十一月十日右馬頭の家のこそ子

氷　沈月の彰こるみのうき氷の川ハ結ぬみの枝の夢

朝霜　日彰さ沈彰ものまのまさきかたらぬ物けをたつる星人

竹　松の心木の高のうきふしを此世のおもきくあらしかな
おなしとその清宗の中にあり
湖千鳥　鳴の海やつまさにかゝる夜波に狂ひたれく鳴チドリ
宗草　人心屋むかたの思ひにもあらぬ葬のまさしそのれり
閑居曉　三稱よ出る星とやこほし曉のそふにそむくる宿の灯
同廿八日草庵の月清三そうり
竹　霰　おとるくしをとる風ハ木のまにたまりて落るむ寒ひ
爐　火　をめてかゝ狂きつめてむらふがうつまれぬ心の狂る光を
島　鶴　無津しかり島しるき給本ノ志なきこそ狂れもたつそむ
おれし時の清宗の中にあり

宗祐

屋上霰　狂ふにしたれハかたし閑の上の本葉へそこそくあられ
宗嶺　立消し稲葉の峰のしらつゝまつるかれるゝくれも
旅泊重夜　かちとゝんのさやいつともしら浦の立くる夜に和とまて
閏十一月八日中務大輔家の月清三そうに
深　雪　川上の雪そ一むらくるりくるとやら人の宮治の葉和
神　樂　とりもかへしそふ柳の春の内にさゆるまさよの神そ明り
顕　慈　多まそしる庭もあらはなるとよりさしこそ汐の浦の千潟と
同時の清宗の中にあり
帰　鳫　かきみたつしまふもち摺たまにしたくのへる春のうかな
渡　月　月やる浦のまむもゆらのとふまちしてぬき渡る毎人

曉　虫　五月の月のつゝの新にさへかくれゆくむしのこゑかな

豊明節會　立出るをこのよ独の雲のこゝにあむく月かゝの糸井のこゑ

宮の原怠　なのこゝてもうつゝふまをさのみなと思ひ志めちかゝ原の下宮

山家　新をき岩まにつゝる山水をもめるんのゆくくそこ陳

旅　宿　月のきるまでの志のやれのや遊さきたらんをのふるよもかな

同十日右馬頭の家の月頃こゝそこに

冬　日　尾こなる松に入日のかるよりタ雲いそく整くの冬枯

網　代　橋姫の頃よりしくれ手のたなかみつゝく宮治の末にし木

舊　怠　志のもとこのももの頃しとの三昔ん拾し中のむつさ

れなし時の讀家の中にし

花　言稱なるものさそふ風もしく新よりふきみよし時の山

鴨　あしかものむれとつもの新雲雲のも風もあれや雲けき

鷄　鳥の稱につゝる道ハ志ねともむてゆるをまさぬよも遠

十三日茅屋の月あみ三ぞうし

炭　竈　ごりしをしも山の頃に廉ハさて烟たちあひ嶺の炭かま

舩中雪　山本の嵐の雪の下和葉頃よりくるあそ乃そ行ふ

曉　怠　うき梅となりもかこそ五月の法ほなくみそしとゝりの月

おなし時のよみ家の中に

社頭雪　ふるまゝに松よりや雪き住よりれひ合の雲乃上のもつ雪

宮の延怠　立よりしハ侍りし床の小延ハ我よりしよもちりも清かりつゝ

橋上苔　うたてくる苔の衣を岩橋にぬきかくつまとみゆるそれ

廿六日河波ちかの月は三そに

連日雪　詠めやる雪そまちかき浮神し日数たるけき故路の志

池水鳥　かよひしも蘆へてつるみの池の氷にあそふかものむとつま

寄塵恋　流にぬる木の数もかさなりてかたへちりもむ床のさむしろ

同時よみ寄れ申に

水郷寒芦　霜おそはたやまとしかき夜川のあしのよのまにのるそこのなに

寄弓恋　うき身にハ梓のまちにまもしらぬ恋路にしてたてつる

夢　ぬるうちにみるをうつと思ひたれハ見えての夢のかひやなりけん

十二月三日海市ちの僧正身子の持宝禅師に華厳

子相

宗管そなたゆつるとくむさしさしら墨の袖のやうになつる

くかやふきの和作くかさもしらにまちかるもみたるよし

なほ侍るとくまかるとふひしにしつまむりし拙語な

とし乞相法道の拙ちさきなとかたつまく一讃あしに

冬月　なにもしやのやう彩をかる月の霜おきつゝ雲深の袖

寄山恋　きぬしをなほしても急く中にこよ海る妹をの山のつゝかも

述懐　何事も老てハ思ひ拙あきさてとりしらぬ志きしまの君

同ある同和にくおのし跡をさくつまく

霞　春をしめく霞める志のとの曇りやてへてこそ明るさ

河紅葉　しましもまこ故の秋のもみちもをつくしハにしき中川の

寄虫恋　口上がらと恋にや捨ん延喜のかるむ蘭かく上れむしの涙を

羇旅　友とのミ松の根に竹の垣ゆある宿ハたひ孫ともなし

十四日草庵の月次之発

柏霰　柏木に冬ハ葉ちるの神さきもしらくやぬさと霰ちるらん

夜千鳥　孫にそなくせつにとわてる友子ある絵なきそのりへをやしる

歳暮　之上とりけ年木ゆるをのおのつらはれ小松や子日まつらすら

おなしときの読ぶり乃中に

冬海　打出る子ゆ海の海のゆる雲も冬枯しらぬ浪乃うへの家

早梅　手向ともみよの仏をしらしとなふる朝の花のうめの枝

門杉　明とるみとゆゑのけく神さきしるし杉たてる家門

としのくれ松梅院の女さよりも百年の点をかけれしを

しるしとつまひとくおくに

當くりけ年の光もそふまちもみられけりとみゆるむら

かゝし

あらたな文書の光をまちそこむ天つみのゆるむのさしのを

永享四年正月一日清水のとしのるしふく臺をとるつい

てに

ふしらしものとさきしの緑よりまをあらまひ和日新のな

二日子房の井にしうくひまのなくとさくく

ことしまふいまてそ思ふまた千世をうくひまのこゝろかつくそ

いりて菜へいつとなく

まさ木ていまつ候むの故そと思ひなしにもせいそのとさ

七日いつりのるまふく少姫のやしろに来りてくんに思ひ出せ

ことを手向をする夕月相をしきりとなるに いつのまち

よりも梅とく候て匂ひこちたるに此後のことをあらし

く月にえまさるまつちし侍ふ

梅ハ其も月の光もこすかりて神のこゝろにさそとまるらん

常相もやしなとまあつるとろ畠山河波る筆ゑなと

もやしこの青頭とやいつことをあつくら且しをしらぬな

のうちあまたしてつかし侍るにんのうちに覚えし

十四日ハ又やまのこゝろ菜そきの田やこゝろの浦のあみにしたし

十いる山名中務大輔照貴家よくこのみこしに

初春霞　くるまちハ日数もうちをしるべくまゝあなかれる山のこゝろ

夕春月　雪ぬまにかまむ光を待るや入日まむかふやまのもの月

山家路　安島のこゝにんこゝかまましいのある山のおくにまむとも

廿六日海中ゟ唐經信山のこの閑居の室にまかりたり

しに苔ふき神のこゝもすゝしにかまつるまいちしく

侍るにのやか新も竹の垣かあしをふきてつきかたに

みえ候柴折くふるよきうもまことに烟をつしも

火みえて人めまえこゝろ雪のこまちをしらぬ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

まゝひあまふにてしまくしたりしのはてれとゆしくあの
しくしくまふほどのそこはたらまおこなひのしまふにもやまう
のいとまふにもまてきこはてしにくなんとふらひきこと
たくしはたむうしをとりなふのうふく月ましとさひ
思ひのかるたよりとゆさるをはとふらひあることうして
かなうしはまうて侍てきなとたのめくむ月のふんを此
くこそふ

早春雪　庚衣かくさむかき山風ふ雪も霧もまものむらさえ

行路梅　跡波人の袖ぬらせ玉そのこちくる汐も梅にそまを

寄鶴祝　まむ鶴のつまさの雲も逢添(ふる類)きれは契て或世へぬらむ

當坐

山　霞　世をへしほのとしのらのつらもさき日かなて霧むまらん

恨　急　くらし恨まてハ或夜ハ我身ふうさのたちのゐるらすら

浦　松　まつのうらや老木も松のむハあれと我をのものまてきらかき

同伴山栗生とも取ま鎖ちるとりふらるり。靜(ふれ一本)な海

唐しめくとさしかふてさとてむ月中の十日

あまりの此うつ出しふともなひくそこにまのつまく

一夜しまくまたるうしこ山おろしの古忘も夜ハなのほ

ふきら桜のもふつらひくるを古(本ノ)まさましくかけの雲も

所のうたまくをうこかをたらもの水のおとなひにつけ

くもそうるほとうしあらしとおほえ侍るも此事のお

なるむのはものこのりとをうへまゐるゆゑよくまちやく人
めをいとはましとうへえらも酒なくまちもむる人のこゝふき
し侍る御いてに花下久栖と題を出し侍るに 中一本
まゝの道のむとつとる世の教まゐて万世ふくさむの宿るに
まついてゝ信正かくしさ出し
志ましてそうはる志るに思ひてしむのあるしとある姉さよ
かゝるし
宿しむるむのまをくよりも八間ゑんと思ふ事さへうけしき
二月ニ日海ゆるまくやうきたまふる日信正母君かの
寺のかゝまゝに小室をたてゝおこなはれ侍るところに

信正出ゝ出し侍るを御しふるまく待ゐるに世のふるも
のゝまゝる梅の枝にし御音く
志ましまて詠つくさきたゝち孫の座のミやをまくさめん祝
ゑ老も八十の母の霞のいのち風をまけ給ひしこゝろの多賀
しふ山里におきくまかりまゝるゝたにまゝ仏なるやの
うちはましくいふにおほゆるにかくなくさゆらるまゝとの
うゝやまましく覚るまゝ松の枝のやうにきまゝ御ゑく
このまゝに清くてゝ思ふなくさめぬ我たゝち孫の世の山里
同和やをとゝくせそのおよまゝ出しに 中一本
行 ふるやもしまゝに清くまゝにも狩むいさゝむ丹

春　虫　まいまつおもしろきはかへて小女田のまくがきみにかまつかへる

春　祝　ゆきとしのまくしちらまる民の戸をぬりやく相堂をとゝるらん

六日　遠院にまゐりたるに鼠をさくるまく

二月　餘宮　やまとり（さそ类）に鼠（小旦）もさゆる右手にくまたみやきさゝれの宮

寄木列忘　我も又むかへし神を横堂のかゝるのちせのこの志い宗

古寺鐘　よもすがらたえぬ法のこゝろのうちに又うちそふる晴の鐘

八日　小姫の松梅深くまゐりたるに女ぐんちとしかいく

かきるのさまかなるしかしこゝろのへたるなりさるかゝ

はいてにかきて出さるし

姑しくをとまれぬるぞ消ふにしいしまの京なるぬ世と

かへし

こゝろ世霧ものとゝき世をそこむてさゝろに風るしよりを

十三日　人々来て一讀をし（中一本）に

夕春月　夕まゝ日に霧にし梅の匂いさへうまでかゝる月の影の家

待　花　おそくとふ人なるハこそ待ていてうゝみもやゝめまの神む

寄神祝　歳世へ女神をうみの二ましらあいこしまての天の浮橋

十五日　寶塔法師家にくへて鼠をさくるまく

山　霞　天の戸をぬるかゝくあし引のこゝろよりうるく霧むまゝ

聖　萩　東海やゝるまゝ京伊にまつこゝやきの家のまゝ手

落　葉　雲風もきり（さそ类）に来たるの家に霧にほまもまもしきぬこの上

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

羈中閑　学ひえくくらからぬ人も名斗ハとひてそこえん文字の雲鳥

十六日　藤原元康来くおよみし申ふ

餘寒　ふるきハ世界ふたへしせいさえて又二月ふまちやえてもむ

待花　さしもあらぬんなきの行へとやをてもむの猶まさるらん

宮草忘　きしきよ此とき草の秋の露おふてふのへも雪ハまつらし

旅泊　みなと毎ふ後ふるく後こえてうれ孫ともあらぬ松の下ふし

十九日中務大輔の家よくおよみし申ふ

花初開　時をしる一本なりしもんとき枝よや花の七部ハこゆらむ

月前花（追ふ）　木の本の雪ハ光をそへむとや秋月松ハもちるらん

暮春惜花　雪ハ入るよりも猶んなき嵐やむを孫ハかへまてらまる

学相

二ノ四十七

廿二日河波寺の家の月次ふ

庭松經春　ふるふるる新たの松の葉緑立出てよさるまちの色ふ

雪中鶯（當坐）　まちやとき春の雪のあさもよい木ことふむと学そなく

曉擣衣　をとめこも春を七月の月ようてゆるさし天の羽衣

逢別忘　よ別くの夢ままきれぬつるさんにのつて捧つる衣々の色

嶺上松　浴くてき鷲のこる松のまつとハ又雪ハ出んあつき此月

廿五日畠山右馬頭持純の家の月次

鶴千年友（类ナシ）　とも鶴のあらぬ千年のありかをとそへてそ鳴るかの海浜

海（當坐）　霞　いその海や浜の玉の光かも霧をみかくおそつしら波

鵜川　廣瀬川一瀬ふかふかひ火の浴さきくてきタ雪の色

蔦風　松まはふつたもちる軒のくものはに誘てゐる庭の秋風

寄花恨意　さそひし風のやうとおもひてんうつるにむもたのまし

羈中橋　八橋やかたらぬ川も神ぬ里ぬくりてにとゝきたる芝の家

東山のむやうく盛にふゆるむのはたのゆんしのさくも

あるとくいそかもしきにふるなとくふまとくさまるんもし

こゝにゆんる

最行んのむいむさそふ風にそちらぬちらぬまもしなし

廿九日海辺鳥の信正栗すの山庄にかまはれるを尋

まかりたるしに折ふし盛をつくしいろなるにたより

係に神なるといつちし稲妻山中もやこのやく斗

廿二日河波鳥の家の月次に

庭松經春　ふるまふる軒ものの松の葉緑立出てよさるまちのさしら

雪中鶯（當坐）　まちやとき松の室のあさもよいにことにむとゝ学ぶなく

暁擣衣　をとめこも松をもち月の月ようてゆるさし天の相衣

逢別意　よ別くの夏まきれぬつるさんにのつて捧つる衣々の出

嶺上松　浴くてき鷲のこる松のまつとは又無に出んあつき此月

廿五日畠山右馬頭持純の家の月次

鶴千年友（米ナシ）　とも鶴のあらぬ千年のありかをとそくてそ鳴るかの海浴

海（當坐）　霞　いとの海や浴の玉の光かも霧をみのくおもひつしら波

鵜川　廣瀬川一瀬にかよふかひ火の浴さきくてきゝ夕霧の出

蔦風　松ゝまにつゝまる軒のくものまに透てゐる庭の秋風

寄花恨恋　さそひし風のやうとおもてんうつゝにむしたのまし

羇中橋　八橋やかたゝぬ川も神ぬ里ぬくりてにとをさ花之の宮

東山のむやうく盛にふゆるむのけたのゆしにさくも

あるとくいそうもしきにふるなとふるとくさまるんもし

くよみんる

最明ゝんのむはむさそふ風にそちらぬちらぬまも遠

廿九日海辺の僧正栗すのら庄におまけるを尋

まかりたりしに折ふし盛をつくすいろなるにそより

係に神なりといつちし稲妻ら中もやとのやく斗

りしく夕立めきたる雨係にふるまゝなるに大なる霎

ましつゝく花のうにちるとうれとさまを此しをる

あしのんあるうしくむしもふさなるうにおちる

ふきれるまもしもあまりあるやうりしそこそし

夕立に霎うれく稲妻の新そふ花をいつとうにむ

明る三月朔日三十日の新をさくるとく

初春待花（类ナシ）　春はまつんのむの下田と氷はしみにまりせてそ此く

花下送日　かつしなうつゝふとのむの後日数かそへて人はまつしとも

ら家草　まむもうさ山（一类）のかるをいつとうちらぬ命（衣同上）の露をかはし

四日僧正と伴ひく圓明寺といふ寺（山一本）のむをとん侍るに

ましろい侍るかへまくもたゞかく見て侍る同八日阿
波ゆるのあまくなくさゝらるゝみてくへて三十首
きゝゝらるゝ中に

嶺上新樹　從彼嶺やきゝ出いとみなの川嶺より落るおと斗して

曉鶉川　うかい毎此衛平と積雪に月をかくしてのつまさゝなり

初　恋　露分て思ひ入形の初尾をむしかよそにぬるゝ神ゝ

海　かきとめて朝となるら(ら楽)ぬ也しみなさても詠なき事の海ゝ

同十日春日京極のほとりの旅宿より三條坊門
西洞院の邊ゝ草屋の侍るにかゝまて見ふうつゝ侍る
りしも猶ふかくいとしてみ所のまゝのいにかけも

んなるゝ見えてくうけ侍りしに
うれなのうゝ立かへまとも古へと思ふ故にさきゝ嬉しき
十八日ち佐西よりた平隠岐入道草屋に来てきゝに

新　樹　万木の同しことりも天地の恵と高くやきてもそふむ

早　苗　山本の清田のさ形へとゝぬまもおもゝ立雲のふかき比ゝ

待便恋　ちかしや清まにめくる小の津のよしむ(と楽)けをまつの下風

閑中燈　都やふかき詠にとゝはし灯の秋ゝおほくもさむる夏ゝ

廿五日亡父世孝になるゝぬるを聖壽寺とゝふちまゝく
とゝもおとなひし侍に一日經かくてんの内に思ひつゝ字し
清の花々新しくなるゝたゝち孫の代まゝや身をうつゝ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

廿八日 [illegible]

新樹風 [illegible]

夏月明 [illegible]

古寺松 [illegible]

當坐 早春水 [illegible]

閑居荻 [illegible]

寄鳥急 [illegible]

五月十六日中務大輔日吉法樂とてしめられしに

門柳 [illegible]

嶺月 [illegible]

風前落葉 [illegible]

寄煙恋 [illegible]

山家 [illegible]

廿五日海市 [illegible]

峰照射 [illegible]

盧橋風 [illegible]

海路遠 [illegible]

當坐 月前郭公 [illegible]

恨身絶恋 [illegible]

夕陽映島 [illegible]

七月三日[illegible]寺に人をつれし侍るついてにまゐ侍る
[illegible]秋のものを思ひやるそなるこの風をいとゞ身にしむ
[illegible]
たえし[illegible]も山にも身のうちを思ふ後や露乃水上
かへし 僧正
思ふにも身にしむ秋の初風にさまりぬるに袖をさへ出し
三日月の[illegible]なるんよこゝろとゝしとけふて[illegible]
[illegible]
同八日阿波[illegible]の[illegible]親父の二七日をくなりぬる
[illegible]

思ひやれ[illegible]秋の露かゝるにつゝくぬるゝ袂を
かへし
[illegible]
同十日[illegible]
[illegible]
月前秋風 [illegible]秋の月に[illegible]
月前鹿 [illegible]月の[illegible]
不逢恋 [illegible]
蕭寺 [illegible]
同廿日草庵の月次に

草花露　小萩さくふりしかへの山おろし　玉なる露の浦をそこなる
夕稲妻　をしむとやむかふ雲まの山のたふへ日をまつ稲く秋のいなつま
名所海　とさの海やへ汐きさらなきに松もあをぬ瓦の橋立
海邊萩　萩原やうしともたらぬ遊人ハ雪にもゆらし秋の濱かせ
月前鹿　さをしかの秋夕むとつハうき秋に月やあらぬと妻や恋しん
不逢恋　琴小舟ワたらぬ中のさいらもとやなるとさしおくをとれに汐
山家枕　庵をもかくまと結ふ松ハ稲や屋ハて松床の枕なるらん
八月十三日海らしなへまかりて同十四松に百そ家の中に
月前煙　たつまつふしの煙の波の上に光をそくらしあきのよ秋月
関　月　おのつから秋ハくき田の関ゆやいなもの月におきぬらん

潤　月　牛河の緑のむもかくよりふなりて潤にたつむ月かな
河　月　月の秋ハたつまきてをかくまきてふる立しそうの河浪
原　月　ふる雨る麻やしむしきどりせしやあら原の三秋の上の月
閑居月　枕にふ月にむかりをあらぬともたくしはしや庵のまつ風
濱　月　よもすから此まや月ようと濱の天津をとめ秋の調を
磯　月　月にむくさかりあよ玉垂のたりめを中の後のまとゐ
湊　月　秋そ松うき孫の神の湊川よそふかなりしぬ床の月新
社頭月　八幡山おりしかりての川浪にゆき侍とる秋のまち月
月前薄　薄ちる秋風ふくそやとも(なし)神をたつぬるみ山のつき
月前糸　月にむとおのつ出ぬにたてこのもちき松へぬるたつのをとさ

寄月懷旧　思ふらんさみし祝の昔さにおりくれなきて秋のよ秋月

同夜百首の後に三十首　獨吟よし侍る

初秋月　下萩も初風なら寸夕くれに秋とそくるこの月のかゝ年

月前草む　秋はきの寄の下葉もかゝらぬとはりわる月の新て稀ふ

雨後月　煤やきさもしらんハ雨とおくれとも思はぬ月の時晴りけ

松間月　そのへよハかくる清なきれしほに新あらいるいさよひの月

山家月　うかれきて寄にそあらはれ雲風も人なき月の宿とあら寄

月前竹風　月やるるまひつの井の露のまに風も寄世の秋とおくれし

野延月　よるまてぬるいまれきと栗栖なにかくさかるとも月やうらん

澤邊月　霧もれぬかゝて月にたつの鳴その山もの秋の澤あり

月前少雁　秋の月まつよの月のまへにうらうてて雲路にさしもうつもしを

浦邊月　浦路行月まみてこそこまきれ煙ハたてよしかゝまの延（うら）（奏）

月照滝あ　その山の雨をなるより行月の新おちやまぬ青かしの瀧

杜間月　見そ此光その杜ハ世の人の月をめてかしらんよそみ見

月前秋風　まらひあへぬ露を俗よ以こめて月まてとわる小（き）（奏）秋の秋風

江上月　玉津島えもあさからはしふきちいさんよゆうむふきよの月

月前虫　思ふらもあきれ寄秋の月まてハ恨さにをしれむしのよ

月前鹿　按庫の左の月に妻まつも我つ見なきにかくるこのも

旅泊月　うき孫とに月にはこそ汐風も夢の一弄とるむしまての和

月前草寄　秋の寄やそて消なハ弱くもなまよやとる月やなりしむ

菊籬月　うつまけ籬のきくの雲の上に雲の霧に月そのこれる

暮秋曉月　いり秋のかたみあらかる横雲のきえはともにしのちる月かな

寄雲恋　詠ふるひかるんのあるも神しもしらんもつきこ稀の白雲

寄風恋　いくせんかくそあれといかせを同よこるとても忘しあるをは

寄雨恋　東やのあまりも思ひとしる雨そこさ見てつるとにかる袖かな

寄草恋　かれやらぬ冬形の草の霧もうり秋の（る类）ものいろもうらめし

寄木恋　そもしらし恋に捨てし宮治川のまつもの木むのうらぬ命を

寄鳥恋　数ならぬこゝろのうるはあとあれやうんを（も类）思ひ（と同上）て文をうらはて

寄獣恋　とうむなよあれぬる宿のかよひちにしは年かひの犬なくしもも

寄船恋　やまひうつ浦のんのあら後によせる小舟のくるそてそうさ

寄琴恋　中の絃のたえて一ことに思ひおきをぬこぬのまつ風

寄衣恋　思ひかけ[illegible]の浦さへふるき夢ちはかよふ衣もなし

九月二日光明峰寺の十輪院にて神く月次にし

谷紅葉　嶽るき梢無雨にそこひく谷のたくてきあきのくゞ霧

暮秋霜　哉とせう葛をひかる雲の松のれ[illegible]のくる秋をうらむ

寄道祝　ゐみよむりの人の詠法にし[illegible]のそよあふまく

山路（當座）競菊　かさしくもあらぬ袖にちはいまてかくる山路も菊とかつる

侍恋　たのめつまつよになさぬんのてこれとも又るいさよひの月

海上眺望（遠类一本）　月そいるゆらのと浪る横雲に浪路春深き紅路のまゝ

おなし九日海市ちよく月次の家名のみしに

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

判者飛鳥井宗雅

秋月冷　秋の月さへ光を変妙の神とあまるよりその神しも

山紅葉　むらしくもさへ衣とうせ山のそやそ入る深くいさらん

田家鳥　鮮田をる延せのかりのこれ江にさかうちしたつそ鳴なる

九月　此日和平家後州より帰上洛して中務大輔

のりとよりうつの山の葛かつらを送られしに

色そこそ霧雲よりもんさし深くそめてし清るのもみちも

うつの山むとりふるもの稜なるはいそへてこゑまあはましあと

清やらぬ常こそつきなりしよむとのしのふしの山雪

いりしへ世に東氷まくに下向をしたと思ひ出てよめる

ゆるす

霧雲の清くの後もつるのもふるうえものをとそくる

思ひ後よむとり二人はうつの山さゆとも君にあはむとのうへ

清せなくこしは昔のこのもも又やふりましふしの山雪

十月四日高道の親世清みるに氣しく侍局にて

法楽とくすゝめしに影をさくるとく

山初冬　おとは山あかな塚の神をしむよるのお雲にみるはきにはる

暁冬月　かぎ川や彼のにしのなり是まて桃に氷るあるは明の月

愛約恋　深きのさはるをつくる月影に又ふるはいつる神のすゝらさめ

山中瀧　そこそ於たえ氷瀧津岩波の数によみおそ家の中山

五日東下野入道素明所より小さんをゐたしつくとて
菓の枝を折露なりけれ
ふる雪の下にあせひそこえハ又おほかへよ白菓の露
あへし
手ふれも此雪なりおほかしまして一よにしてきく此雪
十二日同素明家にて題をさくるく
沼冬霰　あさ沼や氷の上にふるあられぬるに法りるやらん
里冬月　月のきむ都の辰巳里の名をたゞ身にしれと時雨ふる
秋　怠　学も朱もうつろはぬまに秋るみてうきゆかれぬる中秋衣
暁神祇　八雲たゝ山をしかつゝゆふかけて出雲の神風

十八日北野の万部御経あれ新しく出来たるを
しに係にしたれきく風を聞しかるしかハ其あるりに
とまりて係りしにみやうきてれつりまくまれたるつ
ゐまちの月さし出るしほのしをのを形く窓の外
雪にかゝふきたるさまのたとへむかたなし法とゆんく
のほとにあるしかたより經舟とおさせしに
山　雪　こしの山口色のむのふるし世を法のむしみに三孫の玉
竹　雪　ふるとにいさしたるやの下折にやうて窓うつ形のくれ外
十九日中務大輔家にて衆議判家の中に
月前寒学　さえ所は未だの雲のむ舊月をよりれぬ袖のうへかな

寄時雨意　みし人の俤をこゝに秋風に雲もいく度なにしくるらむ

湖水眺望　たかせよりの浪もまた秋風し辛崎や松もしたりの竹生嶋に

同しきろ寄客のあるしに正廣にかきもとく三ぞの

中一ぞ詠く出し侍る

後朝顕意　秋しかの月にかつるし松ゝ孫によらぬもつらき後の風に

十一月四日海京寺にまかりたるしにその後栗生観

音寺とは寺（山本）より児の出ゆかまとくいとまこひまして

みしに歌をさくるとく

嶺上初雪　冬ハまさりまきさ山のもに初雪（の一本）をしくふる時雨かな

欲別意　みに浪そ落る黒髪のもちきまれのきぬ乃袖

旅行友　言る孔を旅行袖のむらゐを送る一本のもとの契も

同中旬のころ南都成就院法橋清賢ともなひて

泊瀬寺に一七日来籠中をしに十五日夜井とりに坊

にて法楽をしけり（中一本）

冬　雨　夕時雨ふるやゆつさかゝ雲も氷て落るみのこの勢

冬　川　神奈河もやくのすとしのつもや氷ことむせとの白浪

冬　木　雲をもふる川のつに氷るまのまたに友にみやあひん

冬　鳥　ちりまたに法をこゝ鳥の二つひなの母の小のこゝ也さ

ゐるし應永卅四年此寺に籠侍に景積清阿

弥なとゝ身をかゝしかハかくよみる

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

117
105
2

冬衣
旅宿
古寺
釋教

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用